

のが中心だったわけですが、確率で必ず起こるという言葉はまさにそのとおりだと思うのですが、私どもが災害で担当している確率とは母集団が少し違うなど。今のお話は、僕らの人生の中の時間軸における数の問題が大きな母集団だったのですが、私ども災害を担当している人間はですね、自分の人生の時間軸ではなくて、400年前に家康がこんなことをやったから、それをここに持ってきたから関東の治水がこうなっていると。つまり400年前に遡らないと利根川の治水、濃尾平野の治水もわからないわけです。その僕たちの人生の時間軸からかけ離れた、何百年に1回とか何十年に1回という時間軸の確率が今度は災害と関係してくる。よって同じ確率でも、僕たちの災害事故を考えていく場合は、二つの確率論が頭の中に交差してあるのだ、という思いです。私は今までずっと時間軸だけの確率論、100年に1回の洪水というような概念だったのですが、今日先生のお話を聞いて、そうか、僕たちの周りには数という母集団の確率もあるな、僕たちの身近な問題なのだなという事で、改めて災害と事故の話そのような事で考えていかないといけないと強く感じました。

【小出】 確かに確率論といえば、私たちが新聞を作って非常におもしろいなと思うのは、日本国内の交通事故での死者はここ10年、9000人から9500人の範囲内で、9500人を超えないし、去年初めて9千人をちょっときったのですが、原因は千差万別ですけれども、交通事故で死ぬ人の数は9000人代の前半。殺人事件で殺される人の数は、大体650から700人の間とずっと一定しているわけですね。ですからそれぞれの人間の人生というのは、それぞれ別の原因で動いているわけですけれども、トータルとしての人間の行動というのは、何故か不思議な確率というのがありまして、それで、先生が言われた事故の確率、それから災害でも被害があった時の人間の対応ミスというのは確率として出てくるような感じがするのですね。その点ではどうなのでしょう、畑村先生。



【畑村】 今、交通事故の数がたとえば9000とずっとほぼ一定。今は一定に思うけれども、前はもっとずっと多かったですね。20000人いたものが9000人に減ってきた。だけど、それよりも前にずっと激減しているのが労働災害なのです。労働災害だと、今から35年くらい前だと9000人とか10000人いたのが、今は2500人にまで減ってきているのですね。ですから、いろいろな意味で社会的にいろいろな約束事を使い、記名を実行しているうちにやはり努力するとそこまで減っていくのですね。それでもまだ最後の方に残っていて3000人くらいの方が亡くなるのだけど、ほぼ決まったような所、建設業などの数は減らなくなるのですね。それをヨーロッパと比較してみると信じられないのですが、日本って罹災率が倍くらいあるのです。では、日本の方がちゃんとしていないのかというと、日本の方がものすごく労働安全で建設業ではとてもうるさく言っているのだけれども、どこか一番最後の所がまあこれくらいいいだろうというのが出てくるような事が起こってしまうことと、一人ずつが自分の安全は自分で身を守るのだという意識がなくて、誰かがやってくれるのだという意識がどこかにある分だけ、どうも罹災率が倍くらいになる原因になっているような感じがします。

それから、先ほど言われた、時間軸で見た確率と、ある一定の時間を見た時に事象がどんなふうに出ているかという、ちょうど切り口が直角になっているような感じがしますが、それは両方必要だなという気がします。特に僕は災害についてみる場合、先ほどの津波の所をお見せしましたが、人間が生きている時間に比べて、もっと2倍、3倍のロングタームで考えていないと、き